

イタリア～狂熱のバロック歴遊

解説：西山まりえ(バロック・ハープ&チェンバロ)

本日のプログラムは、オール・イタリア・バロックでお届けします。バロック・ハープ、バロック・ヴァイオリン、バロック・チェロ、チェンバロと古楽器を使用し、各楽器によるトッカータ、チャッコーナ、シンフォニアなどの作品と、語りながら歌う〈レチタール・カンタンド〉様式の味わい深い歌曲、さらに打楽器を加えたダンスブルなリズムの魅惑的なオペラのワンシーン、そして最後にはカンタータ！ という盛り沢山の構成です。春爛漫の上野で『バロック小劇場』をお楽しみいただけましたら幸いです。

プログラムは、1600年代初頭、この時代に愛されたバロック・ハープ(別名:トリプル・ハープまたはアルパ・ドピア)の独奏からスタートします。トラバーチ(ca.1575-1647)はナポリの宮廷楽長を務め、その才能を存分に発揮して名声を博しました。彼自身がハープ弾きでもあったことから、「ハープのための」と題された作品は、古いハープの奏法が具体的に示されている貴重な資料となっています。原曲はルネサンス時代の音楽家アルカデルトの作品「どうぞ私の命を絶って／ああ悲痛なる苦しみ／死はわたしの喜びとなる」という歌詞のマドリガーレです。この詩には当時の文学的慣習(法悦や官能的な比喻)で、二重、三重の意味が込められていることを忘れてはなりません。

続くディンディア(1582-1629)の2作品と、モンテヴェルディ(1567-1643)のアリア「甘美なる苦しみ」は、えも言われぬ情緒たっぷりな旋律の歌曲です。愛の苦悩とは恋する相手への最高の賛辞であり、その心情が言葉に即した旋律線や妙なる半音使いなどで表現されています。前半最後は、当時まだオペラという言葉ではなく「音楽寓話」(Favola in musica)と題された《オルフェオ》から抜粋した、類稀なる琴の名手である半神オルフェオが結婚を仲間たちに祝福され、妻の死の知らせを告げられる直前の幸福絶頂に昇りつめるシーンをお聞きいただきます。

後半はイタリア弦楽器の隆盛の響きを中心にお届けします。まずはロッコ・グレコ(1657-ca.1717)のチェロ独奏から始まります。グレコはアルボレア、スプリアーニ、ランゼッティなどの名手を輩出した、偉大なるナポリのチェロの伝統の創始者と言えるでしょう。続いては、ナポリに生まれ、1670年代にイギリスに渡って当地で大成功を収めたヴァイオリニスト、ニコラ・マッティス(ca.1650-after 1713)です。本日は珍しい2声バージョンでのチャッコーナを演奏いたします。そしてトリはナポリの至宝、アレッサンドロ・スカルラッティ(1660-1725)のカンタータを奏します。タイトルは原語で「Ammore, brutto figlio de pottana」、これはナポリの方言で、“amore”の“m”がひとつ多いなど、いわゆる標準的なイタリア語と多々違う点があります。直訳すると「売春婦の息子」とのこと。恋に苦しむナポリ男が愛の神アモーレに向かって吐き捨てるスラングです。野菜を比喻にしたエロティックな表現もあります。さてさて、ドキドキの続きはステージで！ どうぞイタリアンなバロックの午後をお楽しみください。